

【D年】復活節第3主日(2024年4月14日)

【旧約聖書日課】イザヤ書 61章1～3節

- 1 主はわたしに油を注ぎ
主なる神の霊がわたしをとらえた。
わたしを遣わして
貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。
打ち砕かれた心を包み
捕らわれ人には自由を
つながれている人には解放を告知させるために。
- 2 主が恵みをお与えになる年
わたしたちの神が報復される日を告知して
嘆いている人々を慰め
- 3 シオンのゆえに嘆いている人々に
灰に代えて冠をかぶらせ
嘆きに代えて喜びの香油を
暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために。
彼らは主が輝きを現すために植えられた
正義の樅の木と呼ばれる。

【使徒書日課】ペトロの手紙一 1章13～25節

13だから、いつでも心を引き締め、身を慎んで、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。14無知であったころの欲望に引きずられることなく、従順な子となり、15召し出してくださった聖なる方に倣って、あなたがた自身も生活のすべての面で聖なる者となきなさい。16「あなたがたは聖なる者となれ。わたしは聖なる者だからである」と書いてあるからです。17また、あなたがたは、人それぞれの行いに応じて公平に裁かれる方を、「父」と呼びかけているのですから、この地上に仮住まいする間、その方を畏れて生活すべきです。18知ってのとおり、あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはならず、19きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです。20キリストは、天地創造の前からあらかじめ知られていましたが、この終わりの時代に、あなたがたのために現れてくださいました。21あなたがたは、キリストを死者の中から復活させて栄光をお与えになった神を、キリストによって信じています。従って、あなたがたの信仰と希望とは神にかかっているのです。22あなたがたは、真理を受け入れて、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、清い心で深く愛し合いなさい。23あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることのない

生き言葉によって新たに生まれたのです。24
こう言われているからです。

「人は皆、草のようで、
その華やかさはすべて、草の花のようだ。
草は枯れ、
花は散る。

25 しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。これこそ、あなたがたに福音として告知された言葉なのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 21章1～14節

1その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。2シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼバダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。3シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。4既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分らなかった。5イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。6イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打つとみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。7イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ。8ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペクスばかりしか離れていなかったのである。9さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。10イエスが、「今とった魚を何匹か持って来なさい」と言われた。11シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。12イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いたがそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。13イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。14イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書61章1〜3節

- ¹ 主なる神の霊が私に臨んだ。
 主が私に油を注いだからである。
 苦しむ人に良い知らせを伝えるため
 主が私を遣わされた。
 心の打ち砕かれた人を包み
 捕らわれ人に自由を
 つながれている人に解放を告げるために。
- ² 主の恵みの年と
 私たちの神の報復の日とを告げ
 すべての嘆く人々を慰めるために。
- ³ シオンの嘆く人に
 灰の代わりに頭飾りを
 嘆きの代わりに喜びの油を
 沈む心の代わりに賛美の衣を授けるために。
 彼らは義の大木
 主が栄光を現すために植えられた者と呼ばれる。

ペトロの手紙一1章13〜25節

¹³ それゆえ、あなたがたは心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。¹⁴ 従順な子として、かつて無知であった頃のさまざまな欲望に従わず、¹⁵ あなたがたを召し出してくださった聖なる方に倣って、あなたがた自身も生活のあらゆる面で聖なる者となりなさい。¹⁶ 「聖なる者となりなさい。私が聖なる者だからである」と書いてあるからです。

¹⁷ また、あなたがたは、人をそれぞれの行いに応じて公平に裁かれる方を、父と呼んでいるのですから、この地上に寄留する間、畏れをもって生活しなさい。¹⁸ 知ってのとおり、あなたがたが先祖伝来の空しい生活から贖われたのは、銀や金のような朽ち果てるものによらず、¹⁹ 傷も染みもない小羊のようなキリストの尊い血によるのです。²⁰ キリストは、天地創造の前からあらかじめ知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために現れてくださいました。²¹ あなたがたは、キリストを死者の中から復活させて栄光をお与えになった神を、キリストによって信じています。したがって、あなたがたの信仰と希望とは、神にかかっているのです。

²² あなたがたは、真理に従うことによって、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、清い心で深く愛し合いなさい。²³ あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、

すなわち、神の変わることをない生ける言葉によって新たに生まれたのです。²⁴ こう言われているからです。

「人は皆、草のようで、
 その栄えはみな草の花のようだ。
 草は枯れ、花は散る。

²⁵ しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。」これこそ、あなたがたに福音として告げ知らされた言葉なのです。

ヨハネによる福音書21章1〜14節

¹ その後、イエスはティペリアス湖畔で、また弟子たちにご自身を現された。その次第はこうである。² シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それにほかの二人の弟子が一緒にいた。³ シモン・ペトロが、「私は漁に出る」と言うと、彼らは、「私たちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何も捕れなかった。⁴ すでに夜が明けた頃、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。⁵ イエスが、「子たちよ、何かおかずになる物は捕れたか」と言われると、彼らは、「捕れません」と答えた。⁶ イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば捕れるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまりに多くて、もはや網を引き上げることができなかった。⁷ イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ。⁸ ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。⁹ 陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚が載せてあり、パンもあった。¹⁰ イエスが、「今捕った魚を何匹か持って来なさい」と言われた。¹¹ そこで、シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多く捕れたのに、網は破れていなかった。¹² イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちは誰も、「あなたはどなたですか」と問いたがそうとはしなかった。主であると分かっていたからである。¹³ イエスは来て、パンを取り、弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。¹⁴ イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・4月14日「復活節第3主日」の日課主題は「復活顕現(2)」。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、主が油注いだ者を遣わされることを告げる預言の箇所。使徒書日課は、「ペトロの手紙一」から、主の言葉に信頼して聖なる生活を送るよう勧める箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、ティベリアス湖で弟子たちの前に復活された主が姿を現されたことを伝える箇所。

旧約日課(イザヤ 61章より)

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一に置かれた預言書。書名になっている歴史的な預言者イザヤは、前8世紀の南王国ユダで四代の王に仕えた宮廷預言者。本預言書の1~39章は、その宮廷預言者としての公式活動記録(「預言者イザヤの預言の書」?)を原資料として編集されたと考えられる。他方、40章以下は、前6世紀、南王国が滅亡した後、バビロン捕囚を経てペルシア支配の時代を迎えた時代であることを明確に示す言及があるなど、後代の加筆編集であることが確実である。おそらく、歴史的な宮廷預言者イザヤを模範とする祭司・預言者集団が、ペルシア支配時代になって始められたユダヤ共同体再建事業を進める中で自分たちの方向性を示すために、元来の「イザヤの預言書」に加筆する形で現在知られている本預言書の最終形を完成させたものと考えられる。40章以下は、一般に「第二イザヤ」と呼ばれる。

・「第二イザヤ」は、ペルシア王「キュロス」の名を挙げて「油注がれた人」と呼び(45:1)、並行して、主に遣わされた「主の僕」の姿を描く。「主の僕」は、その使命のゆえに人々から蔑まれ、捨てられ、忘れ去られていくが、そのことのゆえに人々の傷を癒し、平和を実現する者である、という預言が展開される。この「主の僕」が何者であるのかということは、古くから議論されてきた。「キュロス」と同一視する見方もあるが、歴史的なキュロス王の実態には一致しないし、むしろ対極的な存在として描かれているとも言える。「第二イザヤ」は、この「油注がれた人キュロス」と「苦難を受ける主の僕」という両極の姿を統合した者の姿を、一つの理想として示そうとしているのかもしれない。日課箇所に描かれる「わたし」は、そのような統合された者としての「油注がれた主の僕」を描写しているとも言える。

・日課箇所は、通例、「貧しい者の解放を告げる福音」として解される。新約「ルカ福音書」は、この預言を主イエスの働きを解釈するために主イエス自身に告げさせている(ルカ 4:17 以下)。初期教会は、この箇所のみならず「イザヤ書」、特に「第二イザヤ」を、主イエスの十字架死の意義を解釈する上での第一の典拠としていたと考えられ、「新約」諸文書で引用や影響が見られる。

使徒書日課(Ⅰペトロ 1章)

・「ペトロの手紙一」については、前回資料「聖書と祈りの会 240403」も参照。日課箇所は、前週使徒書日課に続く箇所。

・本書箇所は、主イエスを直接知らず、主イエスの直弟子たち(使徒らのエルサレム教会共同体)との直接的な接点もほとんどない、ディアスポラ系ユダヤ人の間で始まった第三世代以降の信者共同体に向けて宛てられている。その中には、もともとユダヤ人の会堂に出入りしながら改宗(割礼を受け、律法遵守の生活を始める)にまでは至っていなかった「神を畏れる人」と呼ばれる異邦人らが多く含まれていたと推認される。彼らは、割礼や律法遵守というハードルゆえに「改宗者」としてユダヤ会堂共同体の正規メンバーには数えられていなかったが、シリア・アンティオキア教会から派遣されたパウロらバルナバ宣教団の教えにより、「キリストに従う者たちの会堂共同体」に「洗礼」のみで正規メンバーとして迎えられようになっていた。このような宣教展開に対して、エルサレム教会共同体の中には慎重な態度を示し、「割礼」や「律法遵守」などを保持して「ユダヤ会堂共同体」の枠組みの中に留まるよう働きかける者もあったと考えられる(「ガラテヤの信徒への手紙」など参照)。そのような動きに対して、パウロが反発して対立したこともあったが、最終的に両者は調停的な関係を築くに至り、2世紀以降ユダヤ会堂から完全に分離するに至るキリスト教会共同体の基礎を据えることになった。これらの過程で、ペトロの全教会に対する指導的立場は不動のものになったと推察される。本書箇所は、ペトロが、当初指導していた第二世代信者のみならず、バルナバやパウロらが開拓した第三世代以降の信者からも信頼を勝ち取り、指導者としての言動が期待されるようになっていたことを背景に記されたものとして解される。

・本書箇所の読者は、「キリストを見たことがない」(1:8)世代の信者であるが、ペトロは彼らに向けて繰り返し、「イエス・キリストが現れるとき」という希望を語っている(1:7、1:13、4:13)。この「現れる」の原語は「アポカリュプシス」で、「パウロ書簡集」では「啓示」あるいは「現れ/来られる」の訳語で(ロマ 2:5、8:19、16:25、Ⅰコリ 1:7、14:6、26、Ⅱコリ 12:1、7、ガラ 1:12、2:2、エフェ 1:17、3:3、Ⅱテサ 1:7)、「ヨハネの黙示録」では「黙示」の訳語でみられる(黙 1:1)。この語は、「隠されていたものが顕わにされること」を意味しており、「黙示」の訳語でイメージされるような超自然的な神的现象の現出を意味しているわけではない。しかしながら、「ヨハネ黙示録」の描写と共に、「黙示」と「終末」が結び合わされ、「キリストの現れ」を「終末における神支配の実現に伴うキリストの再臨」として理解することが一般化した。本書箇所が、そのような終末の再臨と言うイメージを共有していたとは、必ずしも言えない。

・16節は「レビ記」19:2の引用。24~25節は「イザヤ書」40:6~8 また「詩編」103:15~16の引用。

福音書日課(ヨハネ 21 章より)

・日課箇所は、「ヨハネ福音書」の物語る「復活顕現伝承説話」の第三幕第一場で、ティベリアス湖(ガリラヤ湖)で七人の弟子たちの前に復活された主イエスが現れられた逸話として物語られている。ガリラヤ地方での復活顕現は「マタイ福音書」が伝えているが、場面は「山の上」であり、日課箇所は「ヨハネ」独自の復活顕現伝承説話となる。ただし、この説話と酷似した「大漁の奇跡」の逸話が、「ルカ福音書」の伝えるペトロら漁師であった弟子たちの召命譚として知られる(ルカ 5 章)。「ヨハネ福音書」は、「共観福音書」が物語る主イエスの公生涯における出来事を、意図的に時期の設定を入れ替えていると考えられる例があり(「神殿清めの逸話」など)、「ルカ」の伝えるペトロらの召命譚を「復活顕現」として解釈させる意図で、これを置いているのかもしれない。

・この説話に登場する弟子たちは、名が伏せられている二人を含めて七人である。「ヨハネ福音書」は、弟子たちの集団を「十二人」の枠組みで示すことは稀であるが、その枠組みを否定しているわけではない(6:67~70、20:24)。ただし、「共観福音書」が十二人のうちの三人、ペトロとヤコブとヨハネを特別な側近の弟子として扱うのに対して、「ヨハネ福音書」はこの三人の枠組みを無視し、代わりに「アンデレ」、「フィリポ」、「トマス」らを重要な場面で登場させ、また名を伏せた「もう一人の弟子」を繰り返し登場させている。日課箇所の説話で名が伏せられている二人の弟子は、これまでの展開から推察すれば、「アンデレ」と「フィリポ」と考えることができるかもしれない。

・大漁の奇跡として描かれる「百五十三匹もの大きな魚」については、何かを暗示するものではないかと、さまざまな仮説が立てられてきた。特に「153」という数に関して、数学上の特殊性(整数 1 から 17 までの和である「三角数」であること、整数 1 から 5 までの各階乗の和であること、など)、いわゆる数秘学におけるさまざまな暗示などが指摘されてきた。

・6,8,11 節「魚」の原語は「イクテュス」。アルファベットの頭文字を用いてキリスト信仰を示す隠語とされた。

来週の誕生日 (4 月 14 日~20 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-328 番「ハレルヤ、ハレルヤ(たたかいは終わる)」(= I 146)は、17 世紀のラテン語聖歌を 19 世紀英国国教会のニールが英訳、さらにフランシス・ポットの改訳に基づいて 1861 年発行の英語讃美歌集に収められて広く歌われるようになった。曲は、16 世紀の代表的作曲家パレストリーナの名が記されているが、彼の曲にヒントを得て 19 世紀英国の音楽家ウィリアム・モンクがポットの英訳詞のために作曲。
- ・21-57 番「ガリラヤの風かおる丘で」(= III 5)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ

別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともにうたおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・蒔田尚昊が曲を付した。

- ・21-524 番「われらみ名により」は、20 世紀初頭の英国で指導的な立場にあった讃美歌作家ディアマー作詞の聖餐讃美歌。曲は、20 世紀前半に米国で活躍した音楽家フリーデルがこの詞のために作曲。
- ・21-90 番「主よ、来たり、祝したまえ」は、1988 年、いまだ東西に分断されていたドイツの教会で、東西統一を願い求める中で作られ、歌われた讃美歌。作詞作曲は、ドイツ南部ヘッセンの牧師 D・トラウトヴァインで、讃美歌を通じて礼拝改革やエキュメニカル運動を推進した一人。

21-328「ハレルヤ、ハレルヤ」= I 146

Finita Jam Sunt Praelia

Alleluia, Alleluia, Alleluia.

Finita iam sunt proelia, / Est parta iam victoria: / Gaudeamus et canamus, / Alleluia.

Post fata mortis Barbara / Devicit Jesus tartara: / Applaudamus et psallamus, / Alleluia.

Surrexit die tertia / Caelesti clarus gratia / Insonemus et cantemus, / Alleluia.

Sunt clausa stygis ostia / Et caeli patent atria: / Gaudeamus et petamus, / Alleluia.

Per tua, Jesu, vulnera / Nos mala morte libera, / Ut vivamus et canamus, / Alleluia. Alleluia!

Alleluia! Alleluia! Alleluia!

21-524「われらみ名により」

Draw Us in the Spirit's Tether

1. Draw us in the Spirit's tether, / For when humbly in Thy name, / Two or three are met together / Thou are in the midst of them; / Alleluia! Alleluia! / Touch we now Thy garment's hem.
2. As the brethren used to gather / In the name of Christ to sup, / Then with thanks to God the Father / Break the bread and bless the cup, / Alleluia! Alleluia! / So knit Thou our friendship up.
3. All our meals and all our living / Make as sacraments of Thee, / That by caring, helping, giving / We may true disciples be. / Alleluia! Alleluia! / We will serve Thee faithfully.

21-90「主よ、来たり、祝したまえ」

Komm, Herr, Segne uns

1. Komm, Herr, segne uns, daß wir uns nicht trennen, / sondern überall uns zu dir bekennen. / Nie sind wir allein, stets sind wir die Deinen. / Lachen oder Weinen wird gesegnet sein.
2. Keiner kann allein Segen sich bewahren. / Weil du reichlich gibst, müssen wir nicht sparen. / Segen kann gedeihn, wo wir alles teilen, / schlimmen Schaden heilen, lieben und verzeihn.
3. Frieden gabst du schon, Frieden muß noch werden, / wie du ihn versprichst uns zum Wohl auf Erden. / Hilf, daß wir ihn tun, wo wir ihn erspähen - / die mit Tränen säen, werden in ihm ruhn.
4. Komm, Herr, segne uns, daß wir uns nicht trennen, / sondern überall uns zu dir bekennen. / Nie sind wir allein, stets sind wir die Deinen. / Lachen oder Weinen wird gesegnet sein.